

晩秋そして冬支度

山が錦織りなす色に染まる頃になりました。心地よい秋も紅葉と共にあっという間に終りに近ずき始めます。このころには、モントリオールのオールドポートの豪華客船の到来は頂点に達します。毎日２－３千人乗りの客船が早朝に着き、ぎりぎりのスペースの中で器用に向きを変え、バックで入ってきます。今朝も一艘、朝日を受けて入ってきました。港の水面に朝日がきらきら光りを映し、その中を豪華客船が進んできます。サロンに座って外を眺めると、この光景が映画の一コマのように見えます。

豪華客船のとまる棧橋の奥の方に、ひっそりととまっている美しいプライベートボートが見えます。普通のボートよりは大分大きいせいか、大型客船の棧橋の一角にとめることになっているようです。このボートがどうしても気に入り、朝早く散歩がてら見に行くことにしました。何とも美しい流線形。ぼーっと見とれていると、その船に向かって歩く二人の男性がいました。ふと、適当に、通りかかった人に、

「これは貴方の船ですか。何て美しい。」

「いやいや僕のじゃないよ、この人の。」

もう一人の人を指さして彼は通り過ぎました。

もう一人の人は、質の良いジャケットを着込んだ、どう見てもアメリカ人の紳士。

「いや、僕は船の管理人です。」

「オーナーはイギリス人の方ですか。イギリスの旗がついていますが。」

「イギリス系のニューヨークに住むアメリカ人ですよ。有名な靴のメーカーの社長です。モントリオールは初めての旅なのです。この船は２．５億円、経費が年１．５億円。」

そう何気なく微笑みながら、話していました。しかも完璧なフランス語です。ちょっとアメリカ英語のなまりがありますが。水に浮かぶ豪邸のようなものなのですから、メカを入れてこの値段ならわかる気がします。と言って、庶民の買える額の船ではありませんが。金額を聞いても嫌味でない金持ちの余裕がどこかにあります。これ以外に人件費や燃費もいれたら 額は想像を超えそうです。

「そうでしょうねえ。素敵な船ですから。良い旅をなさってください。」

翌朝は、もう船の姿は見えませんでした。後でネットで調べてみると、昨日出会ったあの人は、この船を製造した会社の社長でした。顧客はビルゲイツなど大金持ちばかりのようです。だから、僕は船の管理人といったのでしょうか。彼の会社ではプライベートジェットなども作っているようです。自分のペースで自分の船で世界を旅する贅沢を心地よく感じた美しい船との出会いでした。世界にはこんな旅をする人達もいるようです。

さてさて、客船がはいると、この一角はいっぺんに5 - 6千人の散歩客で膨れ上がります。大工事中の道路もなんのかのです。工事ですか？大工事は、家の前は終わり、石を敷き詰める段階に入っています。家の前を通るサンポールの通りは西から東まで石畳の歩行者天国になることになっています。この古い一角全体が150年前にタイムスリップしたかのようになります。

豪華客船と通り過ぎる観光客を眺めながら、マダム田中は、手術の日の知らせを待ちながら、何の変化もない、普段通りの日々をっています。一度病院にその後の状況を尋ねてみましたが、電話口の看護婦は気の毒そうに、

「手術室が予定を決めるので、私には何の力もないのです。お気持ちはわかりますが、しばらく待っていてください。」

「少し痛むのですが、どうしたらよいのでしょうか。」

「痛み止めを飲んでください。」

「それだけですか。ただ待つだけですか。」

「ウエイティングリストは少しずつ減っていますから、我慢して待っていてください。貴女と同じ状況の人たちが、毎日10人くらい質問してきます。」

看護婦は電話口でため息をつくばかりでした。患者の数が多いのと、この状況を放置しておくのには啞然とします。ケベックの医療体制は思った以上に悪いようです。医者も看護婦も技術者も全て優秀なこの病院でも、なかなか進まない治療状況のようです。戦う相手は病気ではなく、病院の管理体制のようです。どうなることやら。

そんな秋の日、孫娘の七五三の写真を撮りたいと娘からのかねてからの希望で、余り寒くならないうちにと、9月の末日に着物を着てお祝いすることになりました。孫娘の着物は娘の赤ん坊の時の着物のあげをとり長さを調節し、ちゃんちゃんこを着せてごまかすことにしました。娘は、母が作っておいてくれた、まだ袖を通していない小紋を着ることにしました。16－17年前に母が用意してくれた着物のしつけをとっていると、母の顔が浮かんできます。娘には3歳の時の祖母との七五三のお参りが忘れられないようです。自分の娘にも、これだけはしてあげたいと思ったようでした。着付けの人を頼み、娘と孫に着物を着せ、家の中で写真を何枚かとり、外で写真を撮ろうと、建物の玄関を出たところで、

「あら、七五三、かわいい！ここで七五三なんて。。。」

たまたま、日本人の観光客の団体が前を通りました。微笑みながら、娘たちを眺め、振り返りながら通り過ぎていきます。和やかな家族風景の七五三の写真を山のようにとり、その後は、近くの博物館のレストランでランチをして、楽しいお祝いの日となりました。大きな人生の贈り物のような、暖かい心になれる秋の日のことでした。

それにしても、およそ女らしさとは無縁だったマダム田中が着物のしつけをとったり、不慣れな手で必死で着物の手入れをしたり、子育てはどこかで怠けてきたきたことへの

つけを払わせるものなのかもしれません。きちんと母に教えてもらっておいたらよかったのかもしれないと、マダム田中は深く反省しております。

先週は、義理の長男から夕食への招待でした。何と、長男が寿司シェフに変身して、寿司のカウンターサービス風の夕食でした。朝方、長男はクレジットカードの支払いが気になるほど、魚を買い込んだようです。イクラ、ウニ、マグロ、鮭、とびこなど、モントリオールで仕入れるのにはどれだけ手がかかり、出費をすることか。。よく頑張ったものです。台所のカウンターの周りで、握りたてをたべることになりました。久々の美味しいウニやイクラのお寿司です。あー美味しい。

「よー シェフ。素晴らしい。これ、もう一つ。」

「和子、どうこんな感じかなあ。ウニも美味しいよ。」

義理の長男は、もう完全に寿司マンです。

「そうそう、美味しいお酒も買っておいたから。」

嫁は、どかっと日本酒を二本、カウンターにおきました。小さなグラスもだしてきました。お燗をしたお酒がいいからと、温めることにしたのですが、徳利がなく、

「これでいいかしら？」

と出してきたのは、ソーサーでした。

「今度お酒のセットもってくるから。」

マダム田中は、笑いながら、嫁の燗酒のお付き合いでした。ともかく何とか温め、乗りに乗った嫁は、飲むこと、飲むこと。一人でかなり飲んでいました。長男は、握るのに忙しく、それでころではありません。握り寿司の後は、色々なお魚を使った巻き寿司です。この日、お寿司よりも美味しかったのは、貝に入った、新鮮なホタテでした。レモンと分葱の微塵きりでそのままするっと食べたのですが、これがおいしかったのです。この時は白ワインで味わいました。

「僕一度これがしてみたかったんだ。ロイック（弟、ドリトル先生にそっくりな顔だち）がこの間してくれて美味しかったし、楽しかったんだ。」

寿司マンの長男もお寿司をにぎりながら、しっかりと食べていました。

何時の間にか、この子たちにとっては、日本も日本食も、自分たちの物になっていたのだとマダム田中は改めて思うのでした。

そんなこんなで晩秋は過ぎていきます。冬支度にはいります。